多く教えることとあいまって、漢字やかなづかいを教えることと、その言いかえとに時間をとって、事物そのものの内容の教育にまで行かないうらみがありました。文字使用の平易化ということがいつも声を大にして叫ばれたのも主としてこの理由からです。ただに教育の面だけではなく、ひろく社会生活においても、今までのかなづかいが十分統一的に行われていたわけではなく、その混乱と一般人にとっての困難さは、社会生活の能率をいちじるしく低下させていたのが、今までのいつわりのない状況だったのです。

現代かなづかいはこのような困難をのぞくために制定されたものですが、とくに、今までの漢字のかげにかくれて、露出していなかった困難が当用漢字の制定・実行にともなって、大きくわれわれの前におどり出してきた時、現代かなづかいの必要性はとみに加わったといって過言ではないと思います。

では、現代かなづかいとはどんな内容のものなのでしょうか。

二　現代語音とちがう点

現代かなづかいは表音的かなづかいであるといわれています。現代かなづかいのまえがきにも、

このかなづかいは、大体、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。

と述べられています。それではこのかなづかいは現代語音をそのままあらわしているのかというと、けっしてそうではないのです。現代語音をそのままあらわしたものとしては、発音符号が考えられます。それらは、正字法の一つとしてのかなづかいとは性質のことなったものです。現代かなづかいは傾向として表音的ではありますが、あらわそうとすることばの音韻と、それをあらわす文字として採りあげられたかなとの間にはある約束が介在するのです。その約束が現代かなづかいの内容なのです。約束である以上、その約束を知らなければ、――またこれを習わなければ、使うことはできません。ところが、現代かなづかいの条文のいちいちは、旧かなづかいとどのようにちがうかという点を明らかにしようという意図からして、説明がややこみいっています。その条文は巻末に収めてありますから、それを見ていただくことにしますが、それを見やすいように一つの表にまとめてみると、次のようになります。

発音	新かなづかい	旧かなづかい	細則	注意
イ	い	ゐ	一	
エ	え	ゑ	一	
オ	お	を	一	助詞をはを
カ	か	くわ	二	「注意一」参照
ガ	が	ぐわ	二	二語の連合、同音の連呼によるぢづはぢづ
ジ	じ	ぢ	三	
ズ	ず	づ	三	なお「注意一」参照
ワ	わ	は	四	助詞のはは本則としては
イ	い	ひ	五	
ウ	う	ふ	六	
オ	お	ふ	七	
エ	え	へ	八	助詞のへは本則としてへ
オ	お	ほ	九	
ユウ	ゆう	いう いふ ゆふ	一〇	言ふはいう（細則第六参照）
オオ	おう	あう わう あふ（はう）	一二	おほ・こほ・とほ・ほほ等はおお・こお・とお・ほお（細則第九参照）
コオ	こう	かう くわう かふ（こふ）	一三	
ゴオ	ごう	がう ぐわう がふ（ごふ）	一三	
ソオ	そう	さう さふ	一四	
ゾオ	ぞう	ざう ざふ	一四	

トオ	とう	たう　たふ	一五
ドオ	どう	だう	一五
ノオ	のう	なう　なふ　のふ	一六
ホオ	ほう	はう　はふ　ほふ	一七
ポオ	ぽう	ぱう	一七
ボオ	ぼう	ばう　ばふ　ぼふ	一七
モオ	もう	まう	一八
ヨオ	よう	（やう）（えふ）　えう	一九
ロオ	ろう	らう　らふ	二〇
キュウ	きゅう	きう　きふ	二一
ギュウ	ぎゅう	ぎう	二一
シュウ	しゅう	しう　しふ	二二
ジュウ	じゅう	じう　じふ　ぢゅう	二二
チュウ	ちゅう	ちう	二三
ニュウ	にゅう	にう　にふ	二四
ヒュウ	ひゅう	ひう	二五
ビュウ	びゅう	びう	二五
リュウ	りゅう	りう　りふ	二六
キョオ	きょう	きやう　けう　けふ	二七
ギョオ	ぎょう	ぎやう　げう　げふ	二七
ショオ	しょう	しやう　せう　せふ	二八

ジョオ	じょう	じやう　ぢやう　ぜう	二八
チョオ	ちょう	でう　でふ	二八
ニョオ	にょう	ちやう　てう　てふ	二九
ヒョオ	ひょう	ねう	三〇
ビョオ	びょう	ひやう　へう	三一
ミョオ	みょう	びやう　べう	三一
リョオ	りょう	みやう　めう	三二
		りやう　れう　れふ	三三

これを現代語音と現代かなづかいとの間の約束として見ますと、その相互の間に差異のあるのは、次の五つの点だけとなります。

一　オ列の長音は、現代語音ではオー、コーあるいはオオ、コオなどとなりますが、それをおう・こうのようにオ列のかなにうをつけてかきます。拗長音の場合も同じです。しかし、これは、「うをつけてかくことを本則とする」ので、おおとかいてもおーとかいても間違いとはしないとしてあります。ただし、旧かなづかいで、おほ、こほ、とほなどとかいたものは、現代語音では、オオと二つに分けていうときと、オーと長音にいう場合とがありますが、これらは現代かなづかいでは「おお」とかきます。

二　鼻血のように二つの語が連合して、「ち（血）」が「ぢ」となったものは、現代語音をあらわす符号としては「じ」がとられ、したがって、現代かなづかいでも、「じ」であるはずですが、この類のものは、「ち（血）」とのつながりがはっきり意識されるので、「ぢ」を残します。また、「ちぢむ」のように同じ音が一つのことばのなかで連呼される場合にも、上の文字との関係から「（ぢ）」を残します。

三　奈良漬のように、二つの語が連合して、「つけ（漬）」が「づけ」となったものも二の場合と同様の理由で「づ」

を残します。また「つづく」のように同じ音が一語のなかで連呼される場合にも上の文字との関係から「づ」を残します。

以上の三項のうち、一はその約束がひろいもの、それにたいして一のただし書きと、二と三とはややかぎられた場合の約束です。そのほか、一語として現代音と合致しないものに次の二項があります。

四　助詞を・へ・はの三つのものは、現代語音ではオ・エ・ワですが、現代かなづかいでは、を・へ・はとしたのです。これを、お・え・わとするのは、一般社会の心理を考慮するとき、あまりにも行きすぎた処置ではあるまいか、現段階ではまだ、を・へ・はを残す方が自然ではあるまいか、との意見が強く主張されたことと、助詞「を」を「お」とすると語頭の「お」との区別がややむずかしいというようないろいろの点から考えあわせて、このように定められたのです。

五　「言う」という語は、現代語音ユーですから、現代かなづかいでは、「ゆう」とすべきですが、とくにこの一語だけは「いう」とかく約束になりました。この動詞が、いわない、いいます、いえば、いって、などのように活用しますので、その終止形を「いう」とかく約束にしますと、統一的に説明ができるということと、「ぢ」「づ」を残したときと同じように、他の活用形との関係がつよく意識されるというところに、「いう」の残された理由があります。

以上の五つの項目をよく頭にいれていただくと、現代かなづかいの大きな約束 ― 現代かなづかいの条文にあらわれているかぎりの約束は理解できたことになります。

が、さてこの約束をもとにして、一々のことばを書こうとすると、疑問の点が出てくることと考えられます。次章では予想されるそれらの疑点について考えて行くことにしましょう。

3　「じ」「ぢ」・「ず」「づ」とオ列の長音

現代かなづかいを使う上で、予想される疑点は、主としてことばのなかで、「じ」をつかうか、「ぢ」をつかうか、「ず」をつかうか、「づ」をつかうかという問題とオ列の長音についての問題であると考えますから、その二項についてやや詳しく述べてみましょう。その他の点では、

助詞のは、はと書くことを本則とする。

という例外を、助詞「は」が単独につかわれる場合だけに考えて、

では、ては、には、とは、のは、からは、よりは、ので